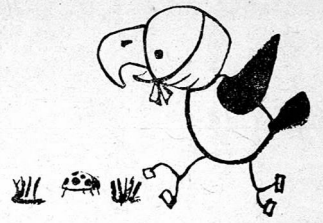


上野幌育種場便り

ポンキンの収穫



十一月の声を
聞くと北海道は
もう一足とびに
冬です。上野幌

も十月末から再三の霜で大半の紅葉は落葉し、とど松の緑が目立つようになりました。冷害型の天候で心配された採種作物の収穫も大半終了し、広い圃場はトラクター

による秋耕を待つばかりです。スーダングラスの禾堆の列、家畜ビートや家畜かぶ等根菜の採種用母本の山、果樹苗木の掘上げ出荷、鉄砲百合その他球根類の始末等、収穫の楽しさも、もう目前に迫っている冬將軍の足音に追われて吹きとばされてしま

ます。収穫物の中で人目をひくのはなんといつても家畜南瓜——ポンキンでしょう。春の冷涼な気温で発育が心配されたポンキンは、その底力を發揮して見事な収穫を見せました。本誌五月号にポンキンの特性や栽培法の概要を紹介しましたが、今日は上野幌におけるポンキンの収穫振りを報告して育種場の秋の便りといえましょう。

一 上野幌の立地条件（札幌市厚別町）

1 土壌は地下三十尺に及ぶ火山灰地で表土は浅く、弱酸性で無肥料では燕麦も一

二倍しかとれない。
2 本年の気候は春以来冷涼多雨で、七月下旬から八月上旬の最も暑い頃でも作業中に汗をかく日は数日しかなかった。五月

から六月中旬までは強い南風が連日吹く。以上のように立地条件は極めて悪い所です。

二 栽培概要

1 前作 ラデノクローバー及びブルーサン採種圃。採種跡を深さ一尺前後に秋耕した。

2 施肥 三年前に反当り一トンの炭酸石灰を施用。本年春は厩肥反当り五〇〇貫、硫酸反当り三貫、過燐酸石灰反当り四貫、硫酸加里反当り二貫、魚粕反当り五貫（一株当り硫酸約一八匁、過石約二四匁、加里約一二匁、厩肥約三貫、魚粕約三〇匁）を施用した。

3 栽植距離は七尺×九尺、一反歩約一七〇株とした。

4 間作としてヒマワリを一四尺×四、五尺の栽植密度で入れた。

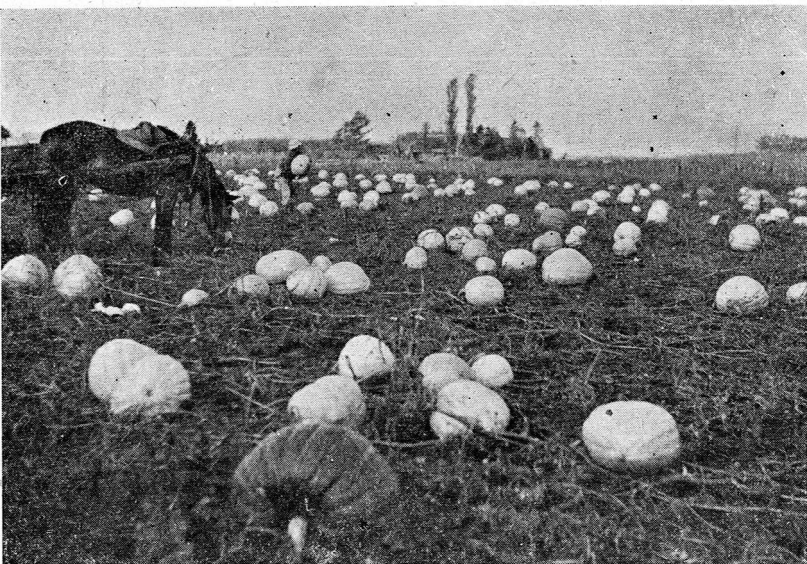
5 播種は五月二十一日、四〜五粒の点播として反当り約一・五升を播いた。発芽は極めて順調で本葉二〜三枚までに逐次間引をして一本立とした。中耕除草は畜力で二回、人手で一回、計三回実施した。六月中旬、強風が続ぎ、若い植物が地際からねじ切られ若干の欠株となった。

6 開花始めは七月二十日前後で、七月二十五日から毎朝二人で約一時間宛人工授粉を行い八月十日頃まで行つた。夏季の生育は良好で、病虫害の発生もほとんどなく、開花盛期までに地表が見えなくなるほど繁

茂した。

7 収穫は飼料用としては九月二十八日頃から始めた。採種用分は十月上旬より収穫した。収穫終りは十月下旬。ラージポンキンは完全せるものは納屋に全部貯蔵し、

9 収量はマンモスポンキンで最大のものは一八貫一〇〇匁、平均四貫前後、一反当り大小併せて約五〇〇個、従つて反当り二、三〇〇〇貫となる。ラージポンキンは最大のものは一六貫九〇〇匁、平均二・五貫、一反当り大小併せて約七〇〇個、従つて反当り一、七五〇貫となる。この収量は悪い条件下の収量であることを考えていただきたい。



圃場のマンモスポンキン

未熟のものは直ちに給飼、マンモスポンキンは逐次収穫し、採種しつつ給飼した。

8 一日の給飼量は成牛六頭、馬二頭、豚五頭に対し一六〇〜一七〇貫。成牛に一日約一四〜一五貫、馬一日約一〇

濃厚飼料としては雪印配合飼料を乳量一升に対し〇・五ポンドの割合であたえてゐる。

以上が上野幌育種場のポンキン収穫風景です。秋の日差しをうけゴロゴロころがっている姿は写真を御覧下さい。

かぶ、ルタバガ、

レートの區別

三浦 梧楼

最近ルタバガの栽培が盛んになつて来ましたが、毎年ることながら、かぶ、ルタバガ、レートの區別が問題になるのでこれらの區別について表示して見ました。何れも生長してしまえば誰が見ても區別できるものですが、問題の起りはグリーントップ（青首）系のかぶ（例えば下総かぶ、峰岡かぶ、場産かぶ、小岩井かぶ等）を「ルタバガ」と誤称し、また一方ルタバガはセンダイカブ、スエーデンカブという別名をもつており、

これらの名称の混同で、同時にルタバガとレート（菜種）の幼苗が類似しているの得益々妙な混乱をまきおこしたものと思ひます。
例えば「ルタバガ」とは「かぶ」であると思つた人が、「ルタバガ」の種子を購入し、生えた幼苗がレート（菜種）そつくりであるのにびつくりし、これは怪しからんと腕をまくつて憤慨したり、始めてルタバガを作つた人が幼苗を見て「なたね」ではないかと疑問をもつたのであらうと思われ

ます。
種子では仲々區別は困難ですが、作物自体は全く異なるものですから、そんなに間違えられるものではありません。次の表は始めての人々のために記して見ました。因みに「ルタバガ」が正しくルタバガ、ルタバカ、ルタバカ等は誤りです。（裏表紙写真参照）**筆者は雪印種苗 上野幌育種場在勤**

葉 色	か	ぶ	レ	ト	プ
鮮緑	青緑または白粉を被る	同上	同上	同上	同上
へら型	しやくし型、やや丸味を帯びる	しやくし型、やや長く下部の欠刻は疎で大きい	しやくし型、やや長く下部の欠刻は疎で大きい	しやくし型、やや長く下部の欠刻は疎で大きい	しやくし型、やや長く下部の欠刻は疎で大きい
葉の大きさ	小	中	大	大	大
葉の形	へら型	中	大	大	大
葉の赤紫色部	紫かぶ系は多、青首系はなし	何れも多し	何れも多し	何れも多し	何れも多し
根部の肥大	本葉七八枚より肥大する	同上	同上	同上	同上
首（短き莖）	なし	あり	あり	あり	あり
生育時の生育	早い	やや遅い	早い	早い	早い
生育期間	六〇〜九〇日	九〇〜一八〇日	九〇〜一八〇日	九〇〜一八〇日	九〇〜一八〇日
根	平滑扁円または円球	不正球形、凹凸あり	不正球形、凹凸あり	不正球形、凹凸あり	不正球形、凹凸あり
種子色、大きさ	赤褐色、小	黒褐色、中	赤褐色、中	赤褐色、中	赤褐色、中

第五回育種學會北海道談話會講演要旨

ホウレン草の種子における

発芽後の生長を抑制する物質について

北大農 宮 本 隆 夫

ホウレン草の播種に際し、発芽を良好にするために種子を水に浸漬することが広く行われている。發育実験の結果において

も、果皮をつけたままの種子の発芽及びその後の生長は不良であるのに対し、果皮を除いた種子では良好である。

これらの事實は果皮に何か水溶性で発芽後の伸長を抑制する物質が存在することを暗示せしめるもので、すでに研究の發表されたものもある。（石川、一九五一その他）われわれもまたこの問題について二、三の実験を試みた。すなわちまず果実をすりつぶし、それを七倍の水で抽出したところ、その抽出液には明らかに抑制作用があることを知つた。従つて次にその中の如何なる物質が作用しているかを次の方法で追求した。

すなわち抽出液を醋酸鉛、炭酸石灰等を用いて順次フラクションに分け、各フラクションの何れが発芽伸長を抑制するかを検討した。

その結果醋酸がその作用を有することを知つたので、結晶として取り出された醋酸につき各濃度とそれが幼芽根の生長に対する抑制の程度を調べたところ、三〇〜五〇%以下は抑制作用は認められないが、五〇%以上二〇〇%の間では濃度に依りて抑制され二〇〇%以上では幼芽も幼

根も少し出たままではほとんど伸びることが出来なかつた。

抑制作用は醋酸アンモニウム、醋酸カリ、醋酸ソーダ等の中性塩においても同様認められ、抽出液は強酸性ではないから、抑制物質は果皮中に主に可溶性中性塩の型で存在するものであらう。

従つて種子を播く前に水に浸漬する作業は、可溶性醋酸塩を除去する意味が多分に含まれるものと考えられる。

また石灰は可溶性醋酸塩を不溶性にして、植物にとつて無害なる醋酸石灰にするから、石灰の不足している酸性土壌にホウレン草が不適である理由の一部も、この辺にあるものと考えられる。なお故牧野岩男氏も同様の現象と分析結果を同じ科に属する甜菜においても得ていたことを附言しておく。

牧草と園藝

第一巻 第十号
定価三十円 送料四円
昭和二十八年十二月一日発行
(毎月一回一日発行)

編集兼 五十嵐 清
発行人 三田 徳 光
印刷所 興国印刷株式会社
印刷所 札幌都立印刷局
発行所 雪印種苗株式会社
札幌小樽一八二四番